様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　６月１９日現在

研究種目：萌芽研究
研究期間：2007～2008
課題番号：　１９６５３０４７
研究課題名（和文）　農村青年の生活史と社会構造—戦前・戦中期の農村社会史—

研究課題名（英文）　A Life History of Farm Youth and The Social Structure : Social History of The Rural Communities Before 1945

研究代表者
高田 知和
東京国際大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：７０２３６２３０

研究成果の概要：
茨城県南部の農村をフィールドにして、第二次大戦の戦前・戦中期—特に 1930～40 年代—にその地で暮らしていた一人の農村青年の日記を資料として、その生活史を社会構造の変容に重ね合わせながら明らかにした。そこでは従来のような統合論や農民支配論だけでは論じきれない農村青年の主体性と煩悶が見出され、またそれが社会構造の変容、ひいては 20 世紀全般の農村社会構造の歴史のなかでどのように位置づけられるのかを明らかにしたのである。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
年度			
年度			
年度			
2007 年度	600,000	0	600,000
2008 年度	500,000	0	500,000
総　計	1,100,000	0	1,100,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：生活史、社会史、農村青年、日記分析

１．研究開始当初の背景
(1)研究代表者は、これまで茨城県稲敷郡奥野村（現牛久市）に戦前・戦中期に在住していた一人の農村青年の生活史を明らかにしてきていた。それを単に一人の生活史としてではなく、当時の社会構造と 20 世紀全体の農村社会の変容のなかで捉え返していく作業の必要性を感じていた。

(2)戦前・戦中期の農村社会については、これまで歴史学でも社会学でも幾多の蓄積があった。が、歴史学では農村恐慌による農村疲弊から戦時体制化にともない全農村が組織化されていくという観点からの統合論的なものの見方が一般的であった。また社会学では同時代の有賀喜左衛門・鈴木栄太郎以来の実証的な農村研究が存在したが、それらは日本の村落社会の特質の解明に重点が置かれていたため、歴史的文脈のなかで捉え直す視点は少ないものであった。戦後の村落社会

学でも菅野正らの実証研究があったが、これも農民支配の観点からのもので、生活史的な要素は少なかった。

(3)(2)でみたように、これまでは総じて個人の生活史と社会構造を結びつけての農村社会史的研究が希薄であったことに鑑み、(1)に述べた一人の農村青年を素材にしてその解明を志すこととなった。

２．研究の目的

(1)「研究開始当初の背景」でも簡単に述べたように、具体的には一人の自小作層の農村青年の生活史を、当時の農村の社会構造と 20 世紀全体を通じての農村社会の変容との関係性のなかで説明していくことである。その際、特に生活史に重点を置き、その青年の農業労働や家族周期、そしてそれらによってもたらされる彼の心性を、明らかにしていくことを目指した。またこの青年は準戦時体制下では産業組合に書記として就職して村の産業組合の実質的な運動者としての役割を果たし、戦後も農協職員として過ごした。したがっていわゆる通勤兼業の農家の先駆であり、この点から今日の農業のあり方との連続性も指摘することが可能であった。

このように、本研究は、一農村青年の生活史の観点から農村社会の構造と変容とを農村社会史として考察していく研究である。

(2)本研究の中核となる素材は、この農村青年が毎日附けていた詳細な日記である。1915 年生まれのこの青年の、1929 年以来毎年のものが今日でも残されているのである。これは単に農業日誌としてではなく、われわれが通常謂うところの日記であり、したがって日々の生活や青春期の煩悶も非常に多く書き残されている。平均して毎日 400 字前後ずつの文字が書かれており、それ自体がきわめて貴重な記録といえるものである。そのため本研究では、この日記を多少なりとも公にしていくため、少しでもワープロ化していくことも目指した。

３．研究の方法

(1)研究対象である農村青年が附けていた日記である「吉田日記」の解読とワープロ化。

(2)「吉田日記」の著者である農村青年が生活していた茨城県牛久市域のフィールドワーク。

(3)茨城県立図書館・茨城県立歴史館にある戦前・戦中期の茨城県に関わる文献資料の分析。

(4)戦時期の産業組合に関する文献資料の分析。

４．研究成果

(1)研究の主な成果

①日記のワープロ化の進捗。

アルバイト学生の手を借りつつ、「吉田日記」のワープロ入力を進めた。同一の学生に継続的に入力してもらったため、予定以上に入力することが出来た。ただし、膨大な分量を誇る「吉田日記」であるので、まだ完成状態には程遠い。

②「農業観」。

日々農業労働に携わる青年にとっては、激しい農業労働にもかかわらず専業では暮らすことの出来ない側面と、他方で自然のなかで暮らすことの出来る幸福な側面との相矛盾する農業観を常に抱いて労働していた。戦前の大恐慌時から戦中期にかけての農村青年については、特に本研究の対象者が住む茨城県では橘孝三郎や井上日召などの右翼・農本主義や加藤完治のような満蒙開拓へのシンパシーが強いと思われがちであるが、この青年の場合は産業組合を中核とした農業経営の改善と農村の復興を志しており、この時期の農村青年の現実的な志向性を表わしていたと考えられる。

③個人の生活史を「家族周期」のなかにあてはめて考えること。

家族周期とは、一つの家族のサイクルを表わす用語であり、研究対象の農村青年の家のような直系家族においては、そうしたサイクルのなかで自分がどこに位置しているかによって個人の生活史は変わってくる。研究対象の青年の場合、長男であり弟妹が多数いたため、自家に残って農業労働に携わらざるを得なかったので、その際の精神的な煩悶は上記の農業観に大きな影響を与えた。したがってそれはまた、産業組合への志向といった現実路線を選ばせることともなり、やがて通勤兼業化することとなった。

④1930 年代の産業組合の歴史と産業組合教育、特に茨城県の。

戦後の農協に相当する産業組合は、1930 年代初頭の農山漁村経済更正運動のもとで農村復興の中心的機関として期待され、さらに 30 年代後半には配給・供出の村の中心として位置づけられるようになる。茨城県ではそうした産業組合を振興させるために職員の養成に乗り出し、水戸農学校に産業組合科を設置するとともに各種の研修を準備して速成を計った。研究対象の青年は、そうした産業組合の書記として 1938 年末に採用され短期

研修を幾つか受けながら現場の技術を習得して、やがて行政村としての奥野村の産業組合の中核的な人材となった。戦中期の産業組合を考える際に、このように現場を支える人材に注目する必要がある。

⑤「むら」としての桂。中桂から桂、奥野村、稲敷郡、県へという活動範囲の拡大。
　この青年が生活していた桂地区は、近世のむらである。桂は上・中・下と三つの組に分かれており、この青年は中桂に居住していた。「吉田日記」を通してみると、一人の人間が子どもから少年期、さらに青年になるにあたってその活動の範域が徐々に拡がっていくことがよく分かる。すなわち、子どもの頃には家の周辺の中桂のことのみが記述されているのが、やがて桂全体になり、さらに青年団に加入する頃には奥野村全域に視点が拡がっていく。それが産業組合に入ると稲敷郡、さらに茨城県へと拡がる。その一方でこの時期には既にラジオ・新聞などのメディアを通じて農村部でも東京や世界に情報が繋がっていた。つまりひとりの人間の生活史の場合、20 世紀のこの時期には既に自分の生活世界とグローバル化を重ねあわせて考える必要が生じることになるのである。

(2)得られた成果の国内外における位置づけとインパクト
　「研究当初の背景」にも記したように、まず歴史学では、従来ともすれば統合論的な観点から戦前・戦中期の農村について語られてきたのに対して、本研究では一次史料に基づきながら社会史・生活史的な観点から捉え直したものとして位置づけられる。またこれまでの農村社会学でも農民支配の観点もしくは農村社会構造の視点から検討されてきたものであり、本研究ではそうした見方による成果を活用しつつ、農村の変容を明らかにできた。なかでも日記という一個人が附けていた生活史資料を用いているだけに、むしろ民俗学の成果をも視野に含んだものとなった。

(3)今後の展望
①まず、「吉田日記」の完全なワープロ化を目指したい。非常に貴重な史料である「吉田日記」は、『善治日誌』や『西山光一日記』などこれまで公刊されてきた農民日記に匹敵する豊かさを含むものであるので、少しでも早く完全版をつくることを考えたい。

②1930 年代の農村青年を、むらで農業労働を行ない、産業組合などの販売・購買事業の組織化を通じて経営的上向を目指す者として扱い、戦前・戦中期に通勤兼業もしくは職工農家化していく現実的な青年を、改めて近現代史のなかに位置づけていく作業の必要性を認める。

③産業組合の浸透過程の解明。特にその際に産業組合職員が果たした役割とその限界について、実証的に明らかにすること。これらについては２年間の研究期間中に資料の収集に励んだので、今後早期に成果を出していきたい。

④戦前・戦中期における、生活と生産の場としての「むら」の実態の解明。これまでは、歴史学から農民支配や農村組織化という観点で見られ、また民俗学からは伝統的社会の観点から捉えられてきた同時期の「むら」について、それらを総合するかたちの「むら」の実態を日記記述の中から抉出していきたい。

⑤以上の動向を、戦後の農村社会の変容も視野に入れて、20 世紀全体のなかに位置づけて論考にまとめていく。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
　高田知和「「農業観」を歴史的に考える―農村青年の日記を読む（２）―」（『東京国際大学論叢 人間社会学部編』第 14 号（通巻第 65 号）、2008、査読無。Pp. 17-56）

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計　件）

〔その他〕

６．研究組織

(1)研究代表者

高田 知和

東京国際大学・人間社会学部・准教授

７０２３６２３０

(2)研究分担者

(3)連携研究者